

令和５年度北空知地域住民フォーラム開催結果（評価）

項 目	内 容
1 現状・課題	・平成２７年度に深川保健所主催で住民フォーラムを開催、今後も在宅療養や終活について自分の問題として考えられるような住民への普及啓発は必要であるという結果となった。 ・北空知地域は、在宅医療よりも病院や施設に入院・入所し最期をむかえることが多い地域。患者本人、家族の在宅医療に対する理解、覚悟も必要。家で亡くなりたい高齢者もいるが、病院で安心したい家族の思いもある。単身、老老介護の問題もある。 ・このため、本協議会においても、平成２９年度に北海道看護協会の事業を活用し深川市で初めて開催、以降各市町持ち回りで開催することとなった。
2 目 的	北空知地域の住民の方に在宅医療や介護、地域での支え合いについて考えてもらう地域啓発の場とする
3 対 象	北空知地域在住の住民 地域住民の在宅医療・介護を支える支援関係者等
4 日 時	令和５年１０月２１日（土） １３：３０～１５：４５
5 場 所	健康福祉総合センターふれあい すこやかホール （雨竜郡沼田町南一条３丁目６番５３号）
6 出 席 者	９７名 （参加者の事前申込 ９１名） （沼田町６８名、妹背牛町５名、秩父別町５名、北竜町３名、深川市１４名、その他１名 うち一般６０名、支援関係者３７名）
7 内 容	（１）北空知地域の在宅医療・介護の取組紹介 「自宅で安心して暮らすために～チーム北空知の取組」 ・紹介者 北空知地域医療介護連携支援センター事務局長 村田 真紀 「自宅で安心して暮らすために～訪問看護の取組」 ・紹介者 深川市立病院訪問看護ステーション「みのり」管理者 立花 洋子 ※北空知地域で在宅療養が必要になった時、どんな支援ができるか、北空知地域の支援関係者から事例を紹介しながら情報提供 （２）講演「人生の最後まで健康的な暮らしを支える、医療と介護と保健と福祉」 講師 一般社団法人 Wellbe Design 理事長 篠原 辰二 氏 （３）意見交換 「支え合う地域づくり」
8 結 果	目的：北空知地域の住民の方に在宅医療や介護、地域での支え合いについて考えてもらう地域啓発の場とする ・時間に余裕をもって来場された方のために、地域リハビリテーション活動支援事業で発案した介護予防体操「ライスパワー体操」のＤＶＤ動画を上映。ビデオを見ながら一緒に身体を動かす参加者もいました。希望者へのＤＶＤ提供（１セット２００円）も行い３セットの購入がありました。 （１）取組紹介 ・北空知の将来予測や医療・介護の状況、広域連携の必要性の説明。平成２８年に「北空知地域医療介護確保推進協議会」が設立され、「チーム北空知」を目指しさまざまな取組が行われていることを紹介した。また、介護予防や健康づくり、病気や介護を必要としたときに暮らしを支えるサービスの紹介など住民の皆さんへの情報提供が

項 目	内 容
	できました。 ・訪問看護の取組では、本人と家族の願いに寄り添い、支援スタッフが連携し本人や家族の困りごとに細やかに対応して、在宅看取りを含めた３件の事例の紹介がありました。誰もが迎える人生の最期を本人・家族の思いを尊重しながらどのように暮らしていくのか参加者自身が考える機会になっていました。 (２) 講演 ・篠原理事長からは、「専門職の連携の必要性」、「住民力も必要であること」、「災害対策には保健福祉医療の連携が必要」などについて、ポイントを抑えた詳細な説明をしていただき、憲法や漢字に込められた福祉の意味や、互いに支え合う地域福祉の重要性、災害に備えるためにも地域と専門職がそれぞれの役割を分担することなど、参加者は熱心に耳を傾けていました。 ・WHO（世界保健機構）や日本国憲法での健康の定義は、肉体だけでなく精神的にも社会的にも満たされていることであり、病気や障がいがあるからということだけでその人の健康がさまたげられているわけではないこと、基本的人権に含まれるものであり、生きる事だけでなく死に様でさえも公共福祉に反しない限り最大限尊重されるもの。 ・それを実現するためには個人の努力だけでは限界があるので、互酬的關係（お互い様）、さらには１対１の關係ではなく恩送りのような繋がりが地域の豊かさに繋がっていくこと、福祉とは医療介護福祉の専門職が支えるだけではなく住民も互酬的關係で支え合う地域づくりでもありということ、災害では高齢者や障がい者が犠牲になる事が多いことから個別避難計画を策定し備えていくことが必要。 参加者は、地域福祉のあり方として困った時には専門職への相談だけでなく、普段の生活で支え合うことの必要性に対する理解を深めることができました。そうした意識を持つことで最後まで地域に見守られ「その弱っていく姿でさえもみんなに認められながら最後を迎える」という篠原理事長の言葉に今後の生活の中や取り組みをしていく上で地域づくりを考えるきっかけとなる講話でした。 (３) 意見交換 ・町内のボランティアサークルなど２団体から発言がありました。「のぞみサークル」では活動２０年目を迎え、当初は高齢者気軽が気軽集まれる場所が無かったが、お茶会から始まりゲームや食事会を行い、参加者の笑顔とお礼を励みに頑張ってきたこと、「食生活改善協議会」は年１回食事を通してレシピ集の配布や多団体のアトラクションなどを取り入れ活動してきていることの報告がありました。 ・篠原理事長からは、社会的孤立により健康リスクが高くなる研究があるが、コロナ禍で社会的距離がとられていても精神的距離は縮めていくためにはこの団体のような取り組みは大変重要で是非継続していただきたいという所感がありました。 (４) アンケート結果：回答者数７６名 配布数９７名 回収率７８．４％ ・北空知の取組紹介について知ることが出来た、まあまあ知ることができたと回答した人は６７人で８８．２％でした。 ・講演は参考になった、まあまあ参考になったと回答した人は７３人で８８．２％。 ・自分自身の人生最期を考えることが出来たが３０人、２５．４％、家族の人生の最後について考える機会になった２２人、１８．６％で、自分と家族の双方のことを考える機会となったと思われます。 ・自由記載では、「専門職でないが、暮らしを支える人になれるという言葉に感銘した。

項 目	内 容
	自分も何ができるか分からないが頑張ってみたい」、「難しく考えず、まずは小さな恩送りを一人一人が行っていくことで幸せに支え合える地域が作られていくのだと学べた」「在宅療養するにあたって、とても心強いサポートだと思いました。(本人も家族も)」「在宅で暮らす患者さんの思いが伝わってきた」、地域での支え合いについて考えてもらう場とすることができたと思われ、興味深く参加された様子が記載されていた。 ・参加のきっかけはポスター・チラシをみたが最も多く２９人、３１．５％。在宅医療・介護について関心があったが２３人、２５．０％でした。 (５) まとめ ・アンケートの結果からも人生の最後について考える機会となり、また、自身や家族の人生の最期について今から準備が必要と思ったなどの意見が多く、フォーラムの目的は達成されたと思われます。 ・講演では専門職だけでなく住民も支え合うことで地域づくりが行えるということが憲法や世界保健機構の定義や福祉という言葉の言語的形成過程から紹介があり、本来の源流を辿りながら具体的なボランティア活動の事例や、高齢者や障がい者などサービスを受ける側も支援者になれるなどの話がありました。また、災害における犠牲が高齢者等に多いことから個別避難計画の作成も進めていかなければならない理由をあげられ、参加者は頷きながら熱心に聞かれていた様子が見られました。 ・「支え合う地域づくり」をテーマに行われた意見交換では、町内のボランティアサークルなど２団体から発言や活動報告がありました。 ・北空知の取り組み紹介に対する感想では、具体的な手続きが知りたかった、事例をもっと聞きたかったなど、紹介内容の検討が必要な意見がありました。 ・講演に対しては、大変参考になったという意見が多くあった半面、具体的な事例がききたかった、もう少しゆっくり話を聞きたかったなど、駆け足気味だったという意見かと思われ、内容にボリュームがあるため致し方ないことかもしれません。 ・「あまり人生の最期という感じは受けませんでした」という意見から、講演の案内内容と講演内容が一致していないイメージがあったと思われ、講演依頼時点で開催目的を踏まえた打合せが必要と思われます。 ・感染症対策をしながらも、令和元年度北竜町開催以来、現地開催とし地域住民に広く募集をしました。 ・説明の持ち時間は、概ね予定どおり終了時間で終わることができましたが、全体の時間は予定を１５分超過しました。 平成２９年から開始し１市４町を１巡し、次年度の開催について同様の持ち回りとするかなどの検討を今後担当部会で検討することとします。 (６) 次年度以降開催地 ２０２４年度以降未定 H２９：深川、H３０妹背牛、R１北竜、R４秩父別、R５沼田